
鳳凰未だ墮ちず

ロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳳凰未だ堕ちず

【Nコード】

N7795Z

【作者名】

ロック

【あらすじ】

偉大なる海（グランドランド）の船乗り達の間で、こんな話がある。

この海には、決して敵に回してはいけない男が居る。
黄金に輝くそれを見たら、戦おう等という馬鹿げた事は考えてはいけない。

あれは 化物だ。

＝
＝
＝

はい、どうも初めまして。

ロックと申します。

処女作にございますので見苦しい作品になるかとは思いますが、どうぞお付き合い下さいませ。

プロローグ？（前書き）

はい、どうも初めまして。

激しい目眩と吐き気に襲われ、熱を測ってみたら32度という低体温だったロックという者です。

処女作にございますので見苦しい作品になるかとは思いますが、どうぞお付き合い下さいませ。

プロローグ？

偉大なる海……
グランドライン。

そこは、数多の者達が力を、富を、名声を、そして夢を追い求め集う、険しい海。

数多の者達の野望が、欲望が、希望が、そして絶望が渦巻く魔性の海。

波風一つ無い穏やかな海が、次の瞬間には大嵐に襲われて荒れ果てている、何て事は日常茶飯事であり、『非常識こそが常識』を地でいく、そんな海だ。

だからこそ、人々はそこに夢を見、だからこそ、人々はそこに惹かれていく。

数々の苦難と試練、立ちはだかる不自然な自然の脅威、数多の宿敵との戦い、それら全てを乗り越え、偉大なる海グランドラインの果てを見た者に……、偉大なる海グランドラインを走破した者だけに与えられる称号……、人はそれを、海賊王と呼ぶ。

鳳凰未だ堕ちず

海に浮かぶ、一つの船があつた。

大型に分類されるであろうその船は、一言で表すならば、黒。

船体からマスト、そしてマストに掲げられた旗までもが黒で覆われたその船は、初めて見た者に威圧感を与えるだろう。

だが、どこまでも黒で統一されているからこそ、それは良く映えるのだろう。

白い、ドクロの海賊旗は。

その海賊の名は、ロッド。

『豪腕』のロッドと言えば、この近海で強く恐れられている、文字通り豪腕で名を馳せた海賊だ。

その豪腕は船を真つ二つにするのだの、敵船のマストをへし折って振り回していたのだの、とにかく彼を表す噂は多い。

そんなロッドの首に懸けられた賞金は、4000万ベリー。

十二分な悪党である。

そんなロッド率いるロッド海賊団は、先日襲った商船から奪った戦利品を確かめていた。

「ヒュウ！ こんだけありや、暫くは遊んで暮らせるぜ！」

「くうう！ 次の上陸が楽しみだぜえ！ 飯に酒に女！」

「流石は我等が船長だ！ よっ！ この大悪党！」

「ちげえねえ！」

「当たり前だろう。俺にかかればあんな商船五秒で廃船だ。……言わせんな馬鹿、恥ずかしい」

ギヤハハハと、品の無い笑い声を上げて、船員達はロッドを持ち上げる。

言われる本人も、満更では無さそうな顔で自慢の顎髭を撫でた。

商船を、街を襲い、金品を奪い、皆で山分けする。

そう、それで終われば……、終わっていたのならば、何時もの襲撃後に見られる光景であったのだ。

だが、偉大なる海は、^{グランドライン}彼等に牙を剥いた。

「船長オ！ 9時の方角から変なのが来やすぜ！」

「馬鹿野郎！ 誰から見て9時の方角か言わねえか！ ……言わせんな馬鹿、恥ずかしい」

内心で変なの？ と首を傾げながら、ロッドは船員が指差す方角を見、そして口をあんどぐりと開けた。

「なんだありや……」

思わず口から出た言葉は、船に乗る全ての人の気持ちを代弁していた。

それは、黄金に輝く『何か』だった。

短くは無い時間を海で過ごしてきたロッドをしても未だかつて見たことの無いその『何か』は、ともすれば神々しいと言っても過言では無い様にすら思えた。

もしもここにそれを知る者が居たならば、目が飛び出さんばかりに驚いただろう。

それは、神々しい迄に黄金に輝く、ピラミッドだったのだから。

「何だか知らねえが、このロッド様に見つかったのは運が無かったな！ 野郎共、戦闘準備だ！」

「おおお！」

呆けていた頭を軽く振って正気に戻したロッドは、その顔に獰猛な猛禽類の様な笑みを浮かべ、船員達に号令を下した。

それに二つ返事で答え、素早く装備を整える辺り、この海賊達の錬度の高さが伺える。

そう、このロッド率いるロッド海賊団は決して弱くは無い。

海軍の強烈な攻撃を凌ぎ略奪行為を続けて来たのも、4000万という賞金が懸けられた首も、決して伊達では無い。

相手が悪かった、ただそれだけの話だ。

「おっと、ここは通さねえぜ！ 通して欲しけりゃ、それなりの物置いてきな！」

「まあ、全部貰うんだがな！」

「ちげえねえ！」

訳の分からない黄金に輝く『何か』に、ロッドは大声でそう啖呵をきつた。

それに続き、部下達も下品な笑い声を上げながら口々に言う。そう、そこまでは何時も通りだったのだ。

その男が、姿を現す迄は。

「ほう……？ 自らこの俺に挑む者がまだ居ようとは……」

ゆつくりと上段から姿を見せたのは、一人の男だった。

金色の髪を短く揃えた、整った顔立ちをした男だ。

鷹の様に鋭い目付きに、一目で判る程に鍛えぬかれた一切の無駄の無い筋肉、そしてその身体から発せられる目眩を覚える程の威圧感。

構えも取らず、無手のままこちらに近付いてくる。

そんな、一見隙だらけな男から、ロッドは目を離せなかった。

目を離せば死ぬと、これまで幾度もロッドの命を救ってきた勘が、警報をガンガンと鳴らしていた。

「フッフ……。どうした？ まさか今更臆したとは言っまい……。さあ、かかって来るが良い！」

馬鹿を言うなど、ロッドは声を大にして叫びたかった。

鴨が葱を背負って来たかと思えば、実は鴨葱は自分であった、そんな絶望感に、ロッドは襲われていた。

「テメエ……。一体何者だ……」

何とか絞り出した、掠れた声でそう問う。

ロツドの必死なその問いに、男は口角を吊り上げた。

「俺か？ 良からう、今日の俺は気分が良い。特別に死に逝く貴様に教えてやるう……」

男は、心底愉しげにロツドを嘲笑った《わらった》。

「俺は聖帝サウザー！ 南斗六聖の帝王！」

その日、ロツド海賊団は壊滅した。

偉大なる海には、グランドライン決して敵に回してはいけない男が居る。

黄金に輝くそれを見たら、戦おう等という馬鹿げた事は考えてはいけない。

あれは 化物だ。

プロローグ！（前書き）

どうも。風呂から上がった瞬間にぶっ倒れて妹に悲鳴をあげられた
ロックです。

これにてプロローグは終了です。

7件もお気に入り登録して頂いて、ありがとうございます。
まだまだ未熟な身ではありますが、登録して頂いた皆様の期待に応
えられる様に努力致します。

プロローグ！

ジョインジョインジョイン。

「さて、君は誰にしようかな？」

突然頭の中に、何処かで聞いたことのある音と、若い男の声が響いた。

ジョインジョイン。

「うん……。病人は楽しく無いし、海苔眉も何だかしっくり来ないしなあ……」

鳴り続き、響き続ける音と声が気持ち悪い。

鳴り続ける音が、聞き覚えのある音だというのもそれを助長しているのだろう。

誰しも、咽に小骨が刺さっていたら気持ち悪いものだ。

ジョインジョイン……ジョイン。

「悩むなあ……。ねえ、君は魔法使いかい？ マダンテが使えるなら悩まずに石油王なんだけどねえ」

魔法使い？ 石油王？ 病人だの、海苔眉だのと、訳の分からない事ばかり言っている声に、さつきとは違う意味で眉を潜めた。

……。ん？ 何だろう、そんな訳の分からない筈の言葉群にも聞き覚えが……。

ジョインジョインジョイン。

「ありゃ、返事が無いな……。ってそりゃそうか。うん、やっぱり君は気にしなくても良いよ。悪かったね」

いやいや、お構い無く……。じゃなくてだな。

ジョインジョインジョインジョインジョイン。

「うん、困った時はやっぱりこれだね！ 何れにしようかなっと！」

いきなり適当になった。コイツは一体何がしたいんだ。

ジョインサウザア。

「うん、決まりだ！ 君は今日から聖帝様だ！」

そうだ、思い出したぞ。これ、あの北斗の。

「ふふ。さて君はどれだけ僕を楽しませてくれるかな？」

そんな楽しげな声を最後に、俺の意識は浮上していき

「北斗！ 有情猛翔破！」

「はっ？」

目が覚めたら、死にました。

鳳凰未だ堕ちず

「ヒイ、ヒイ、ああ……。ありがとう、まさかあんなに笑わせて貰えるとは思わなかったよ」

「……そりゃ良かったですね」

不貞腐れた態度になるのも仕方無い話だ。少なくとも、俺はそう思う。

「いやいや、本当に悪いなとは思ってるんだよ？ こっちがミスした訳だしね。……でも、アレは逆に笑わない方が難しいよ」

小さく肩を震わせ、再び笑い出す自称神様な目の前の若い男。

本当に悪いと思っっているのだろうか、疑わない方がおかしい態度だ。

俺は、どうやらこの自称神様に勝手に違う世界に跳ばされそうになっていたらしい。理由は知らんが、この様子だと大した理由も無さそうだ。

だが、普通に送り出しては面白く無いと考え、思い付いたのがさっきのジョインジョイン音。

北斗の拳の格闘ゲームだ。アレで選ばれたキャラクターの力を持たせて行かせようとした（聞けば、俺以外にも何人かこの方法で跳ばしているらしい）が、そこでこの自称神様は『うっかり』ミスを犯した。それが、今俺がここに居る原因であり、目の前の自称神様が爆笑している原因でもある。

何をトチ狂ったのか、俺の精神 魂とも言えるか を海苔眉に殴り飛ばされる寸前の聖帝様に入れたのだ。

想像して欲しい。目を覚ました瞬間に、目の前に拳が向かって来ているのを。

当然、避けられる筈もなく、俺は海苔眉によって殴り飛ばされ、死亡した。

唯一助かった点は、有情拳であつたが為に苦しまずに逝けた事くらいか。

そして、それを見ていたこの自称神様もこれはイカンと俺の精神を拾い上げ、此処に連れてきて今に至る、という訳だ。

俺の抜けた聖帝様は今頃「お師さん……。もう一度温もりを……。とでも言っているのかも知れない。」

「いやあ。君にはとても感謝しているし、悪いと思つていよ。何せ、こんなに笑つたのは久々だね、今はとても良い気分だよ！」

「そうですか……」

だろうな。その腹が立つ程の満面の笑みを見れば、誰でも分かる。

「そこで、だ！ 君にはこれから行く世界を選ぶ権利と、何か一つ願い事を叶える権利をあげるよ！」

「行く世界つてのは、元の世界には……」

「うん。君の考えている通り、それは出来ないよ。君は今、ここに精神 魂と言つた方が分かりやすいね だけで居るだろう？」

ということは、君の身体は今魂が抜けた状態で居る訳だ。身体から魂を抜くつて事は、つまり 「

「俺の身体は死んでいる……」

「 その通り。身体から魂が抜けても、それが短時間なら良いんだ。幽体離脱、なんて言葉をたまに聞くだろう？ 魂が抜けて、その魂が身体に戻れなくなる条件は『その身体が生きているか、死んでいるか』これに限るね。そして、君の身体は既に死んでいる。故に君は元の世界に、もっと言うならば、君は、君の身体に戻ること 出来ない」

「そうですか……」

そうではないか、とは思っていたが、やはりショックなものはショックだ。

「理解して貰えたかな？ では次の話へと進もうか。さつきも言った通り、君には違う世界に行って貰う訳だけど、その世界を決める権利と願い事を叶える権利があると聞いたね？ それを決めて欲しい訳さ」

「あの、それがよく分からないんですけど……。願い事を叶える権利ってのは何となく分かりますが、世界の決定権と言うのは？」

「うん、言葉の通りさ。君がこれから過ごす為の世界を決める権利だよ。魔法がある世界、ドラゴンとかのモンスターが生息する世界、言い出したらきりが無いね。これを自由に選択出来る権利さ」

なるほど。しかし、これは困った話だ。好きに世界を選べと言われてもな……。

「俺の力ってというのは、あの聖帝様の力で固定ですか？」

「そうだね……。うん、その通りだよ！」

おい、どうして一瞬考えた。まあそれは置いて……。聖帝様の力っていうのは十中八九南斗聖拳で決まりだろう。その中でも最強とされる南斗鳳凰拳、確かにこれは非常に強力だ。

あの力を活かして、且つ生き残れそうな世界となると……。

「よし、決まりました」

「了解、じゃあ聞こうか」

俺が行く世界……。それは

「ワンピース、この世界でお願いします」
「ほう……?」

ワンピースだ。この世界を選んだのにもちゃんと理由はある。先ず、悪魔の実なんて非常識的な物が存在しているが、その絶対数はそこまで多い物では無いだろう、という推測からだ。確かにストーリー進行上でスポットライトが当てられたキャラクターは、その大半が能力者だったが、あの世界のあの時代には、海賊達が星の数ほどにうじゃうじゃと居るんだ。その中で、と考えれば、やはり能力者の絶対数は少ない。

つまり、しっかりと相手を見極めれば、戦闘時においても危険は少ないだろうという事。

次に、六式等、無手での戦闘が多い事。南斗聖拳も、十二分に通用するだろう。それに聖帝様って、身体能力だけで六式極めてる様な物だし。

そして、あの世界は非常に自由度が高いのだ。海軍に入るもよし、海賊になって気儘に動くもよし、ルフィ達麦わら海賊団に入るもよしと、選択肢が多岐に渡る。

まあ、これは何処に行こうが同じだろうが……。

「ワンピース、ね。了解了解、了解したよ。さて、次は願い事だけど、何かあるかい?」

「はい、もう決まっております」

これはこの話を聞いた時から決まっていた。

「俺の家族が、今後幸せに生きられる様にして下さい」
「……」

親不孝しかしてこなかった俺だ。最期くらい、親孝行しても良い

だろう？ 婚期を逃した姉も非常に心配だしな。

「わかった。任せてくれ」

「……任せました」

これで、未練は無い。

「それじゃあ、送るよ？」

「お願いします」

人生20年。あまり長生きは出来なかったけど、それでも楽しかったと胸を張れる。

ああ、本当に

「 良い人生だった」

その日、俺は世界から消えた。

「 良い人生だった……か」

そう呟いて旅立った青年。

「こんな目に逢わせられて、良く言っよ」

思わず苦笑が出た。願いを言え、と言われて、家族に幸せを願った青年。

「 良いね……。楽しくなってきたよ……」

「こんなにも僕を楽しませてくれたのは、君が始めてだよ。

「ふふ、さあ君はどれだけ僕を楽しませてくれるかな？」

プロローグ！（後書き）

うん、そうなんだ。

このジョインジョインサウザアがやりたかったただけなんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7795z/>

鳳凰未だ墮ちず

2011年12月28日03時49分発行